新左翼

1969年
10月25日
第42号
月3回5、15、25日発行
1部15円
1カ月50円 半年300円
1カ年600円〒共

発行所
新左翼社
大阪市大淀区本庄川崎町
2—10 トミヤビル
電話（371）5304
振替口座 大阪 88555
昭和43年12月12日
才三種郵便物認可

記事紹介

二・三面 10・21と労働運動 反戦活動家討論会
四面 尼北高民主化の闘い

10・21統一行動 反安保の巨大な奔流

大阪で10万のデモ

主要都市は戒厳状態

安保粉砕・沖縄奪還・佐藤訪米抗議・ベトナム侵略反対などのスローガンをかかげておこなわれた、ことしの10・21国際反戦統一行動は、かつてない規模と高まりのなかでおこなわれた（統一実行委員会の発表によると全国六百カ所で約八十八万人、警視庁発表によると八百三十二カ所で四十六万七百人）。全共闘・反戦によってきりひらかれてきた安保闘争は、この日を契機にして、巨大な労働者階級をはじめとする人民大衆の奔流となって出現した。安保・沖縄闘争の奔流を恐れた佐藤政府は、東京・大阪などの主要都市を戒厳令状態においた。都心部の官庁や会社は午前中で閉鎖し、各商店にシャッターを降ろさせ、各所に警察官を配置し、不法な検問をおこなった。さらにデモ隊だけでなく警官は一般市民に暴行を加え、多数の負傷者をだしただけでなく、東京では二十四日一人の老人がこのため死亡した。しかしどのような厳しい弾圧もおしとどめることのできぬ奔流として、人民の反安保のエネルギーはあふれでた。中核・ブンド・社青同解放派・ML・共労党などの新左翼諸党派は傘下の学生・青年労働者を動員して、東京、大阪、名古屋、札幌などで、機動隊に対して火焔ビンを投げて抵抗し、各地の交番をおそうなどして、はげしく闘った。この日警察の弾圧は横暴をきわめ不当に逮捕されたものは千四百人をこえ、これまでの最高となった。

東京では社共の統一集会となったが、日共代々木派の希望した持続的な共闘は実現できず一日共闘にわり、社共共闘のみじめな内出におわった。

（写真は21日大手前の教育塔前で開かれた青年労働者決起集会）

大阪東区の大阪城公園で午後六時から、広い会場も人と旗の波でぎっしり。道路にあふれでているものもいる。会場が満員のため、また集会が始まっていないうちからデモ隊が出発している。それでも続々と会場につまる。主催者は七万と発表したが、実際六万か十万かわからない程の数だ。最後尾の部隊が会場を出発したのは九時近かった。機動隊は主要交差点に配置されているだけで、フランスデモやジグザグデモを自在にくりひろげ、ナンバ球場前で解散した。

これに先立ち、大手前の教育塔前で、べ平連、反戦反戦が主催して集会をひらき、五千人あまりの青年労働者、学生が参加、六時からの総評主催の集会に合流した。

北大阪制圧—中電マッセンストを目標におこなわれた中核・ブンド・解放派・ML・共労党・各大学全共闘・べ平連などで構成する実行委員会主催の「10・21全関西総決起集会」は二時から扇町公園で、一万人あまりの青年労働者学生が結集しておこなわれた。公園の入口を機動隊でかため、入る者に不法にも所持品検査と服装検査を強制した。午後六時ごろから学生を先頭に中央郵便局前までデモ行進した。このデモの後、曽根崎警察署や、中郵前の機動隊指揮車にむかって火焔ビンがなげられ、各地で市民は投石して機動隊の弾圧に抵抗した。

大阪駅周辺には二万人をこえる市民たちが、このデモ隊をまちうけ、機動隊の弾圧にはげしく抗議し、午後十一時すぎまで機動隊に抵抗する市民の姿がみられた。

破廉恥な代々木党員

会社から220万円もらう

日本共産党代々木派の腐敗と堕落、官憲や資本家との共謀をかさねている事実が、各地であらわれてきているが、さる二十五日ひらかれた全国一般大阪地方連合会の大会で、書記長の竹下輝也と常駐執行委員の柏谷智男の二人の代々木派の党員が、長期争議の「解決依頼金」の名目で、阪急酵素会社とラサ自動車教習所から計二百二十万円を受けとっていることが暴露された。

阪急酵素祖田労組は四十年九月に全員解雇を撤回を要求し闘争をつづけ、昨年九月に三千百二十七万円の争議解決金をかち取った。竹下は同会社から昨年の春と秋の二回にわたり、五十万円づつ、柏谷はことしの春二十万円をもらい二人とも昨三会社から歓待のもてなしをうけていた。

ラサ自動車教習所はさる四十二年一月全員解雇されたが、先月二十日に二千六百八十万円の争議解決金をかち取った。竹下は同所から「取りまとめ金」として百万円をうけとっていた。

竹下は代々木派が牛耳っている民医連耳原病院の労組の出身で、代々木派が全国一般におくりこんだ党員。柏谷も中央本部から派遣されたオルグ。二人とも代々木派から全国一般に派遣された人物。二人は十一日に組合へ辞表をだしているのに、代々木派の大阪府常任委員会は二十四日に除名処分にしている。破廉恥な話だ。「トロツキストと官憲のウンヌンカンカン」には異常な熱意とびん速さを発揮する代々木派も、身からでたさびはずかくすが、かくしきれなくなり、ドタンバまでねばったものと思われる。

同地連は二人を大会で除名処分にし、金は本人に返却させることにしたが、刑法上の罪で告発しない方針である。しかし一般組合員のなかでは「罪人をどこまでかばう気か」と、この甘い処置に対する批判が高まっている。

10・21と労働運動

反戦活動家討論会

ことしの10・21にみられるように、反戦青年委員会は労働者階級のなかでも広がり根を下しつつある。同時に反戦青年委員会運動は10・21によって問い直されなければならないところにきている。すなわち10・8以降の反戦の質というものが一体何であったのか、現在あらためて問題にされようとしている。既成の腐敗した「左翼」をのりこえる、本当の労働者階級の最左翼部隊としての反戦青年委員会の役割は何なのか、戦闘的な労働運動、そのなかでの革命を志向する部分の形成とその役割などについて、労働運動の第一線で活躍している活動家にあつまってもらい、各職場の10・21を中心にした闘争報告の後、討論をおこなった。なおこの報告と討論にもとづいて問題点を編集部で整理し近日中に再度討論会をひらく予定である。

ことしの10・21には新に three のなかに三つの流れがあったと思う。ひとつは「百万の群衆、十万の軍団」という中核派。もうひとつは中電マッセンストライキ—北大阪制圧闘争に代表される運動。最後に下部労働組合員突上げによる山猫スト。われわれは労働組合運動の次元のなかでこのうちどれを選択するのか討論した。（二面へつづく）

電通では組合の大会で10・21を斗いぬかなければ11・13は闘いぬけないという考え方から、10・21には、一時間以上三時間以内の何らかの行動をするということが決定していた。

この組合決定に対するわれわれ電信反戦行動委員会の態度は、10・8以降の闘いを労働運動の次元でどのようにとらえることができるのかを、約一年間にわたって討論してきた。その結果今年の10・21では、労働運動に大きな問題を提起した10・8羽田闘争の延長線上で、どれだけ運動が展開できるのかを最大限追及しようということになった。大阪中央電報局（組合員約一千五百人）のなかには大学とおなじぐらい、多数のセクトが存在している。

年休闘争に300結集

電信反戦行動委

（大阪中央電報局）

紙代値上げについて

新らしい革命的激動の中で奮闘しておられる読者諸兄姉と共に進み、発展してまいりました「新左翼」も、最近の紙代の値上り、特に印刷関係費の高騰により、現状では、その発行が非常に困難になっております。

私たちは、この点を諸兄姉に訴え、「新左翼」の発行を継持し、さらに前進するため、十一月より紙代を値上げすることを決定しました。

事情ご了承の上、一層のご協力、ご支援をお願い致します。

一部 三〇円 一カ月 一〇〇円 半年 五〇〇円 一年 一〇〇〇円（各〒共）

新左翼社

（三面からつづく）

合の執行部は代々木が握っているから、たとえば最近看護婦の強制人事異動があっても組合でとりあげないので、職場で自主的にやらなければならない。こんな状態でも組合の役員では代々木は強くいつも四分六でわれわれは敗ける。組合のなかは新左翼と共産党と中間にはっきりわかれてしまっている。新左翼系の人たちと一般組合員とは断層がある。中間層をどうこちらが獲得するかが、われわれの課題になっている。

G　労働組合のもっている限界というものをあまり抽象化しない方がいいのではないか。もともと組合は体制のなかにあるものだからこれを労働者は反体制の側が活用して、体制を破壊する道具としてどう使うのかが問題だ。組合は労働者のもっともひろい大衆組織なのだから、ここは労働者を政治的に訓練するうえで最も大切な場だ。この二つの機能を混同してはいけない。

E　われわれのところでは「全金につかすはなれず」という方針をだしている。いま全金が手をひいたらわれわれだけで支えていけない。全金はかねを援助してくれる。しかしわれわれは独自の運動を追及し、その運動を全金の内部や地区域にかえしていく。各地域に行動委員会をつくり、組合の枠をこえたつながりをつくっている。そこで経験を交流しながら、組合の枠がはめられているところでは、それを突破するために仲間をふやしていく活動をしている。

A　反戦の出現によって民同は方針をうしなってしまった。こちらの方針の内容いかんによっては、全体の運動をリードできる条件ができてきている。今日の会議でその内容を検討したい。中電ではわれわれが年休闘争をだせば、民同が乗ってこざるをえないところにきている。

今年の春闘で処分がでた。本部から不当処分の責任追及をしろという指示がでた。反戦の連中はそれを実行した。しかし本部にいわせたらその指示はたてまえで本音はちがうという。しかしそんな器用な使いわけのできない青年労働者はまじめに闘った。その過程で管理者をなぐって二人が免職になった。そのことをめぐって、われわれと民同との間は決定的になった。

われわれは「手をかけたのはわるいが、闘争の過程でおこりうることだ。組合は二人を擁護すべきだ。」と主張した。このなかで日共＝民青は「あのような行動はトロツキスト的行動だ」というだけだ。民同はこの闘争でだまってしまう。最後に民同と日共が手をくめば過半数になるので、われわれは敗けてしまった。

そのときわれわれは七・九運動というものを作った。組合が闘う組合員をみすてではならないということでやられてしまう。このようなときどうするか、七・九運動の経験は大切だとおもう。これが民同や民青に対抗するための組織という低い次元にいるとのびない。

もっと大きな視野からの運動をだしていく組織にしていく必要がある。組合の次元にしばられない政治的意識を明確にもった組織がいたるところで生れてきている。

A　七・九運動をつくるときとのような形態の組織を作ったらいいか考えた。当局からも、民同からも攻撃にあう。そこで考えたのは組織体というからには責任者をおかなければいけない。運動体であればべ平連のように参加するものの全員が組織でつかまえどころがない。六、七十名の組織だが、対権力との関係では矛先をかわすことができる。責任者をだせといっても、責任者なんかおいていないし、あえて責任者というなら、運動の参加者全員が責任者だ。しかし運動はすすんでいくし、そこから実際に方針がでてくる。民同もこれを無視できなくなっている。

われわれが考えているのは、第二インター、第三インター、ローザのだした問題もふくめてこれを整理しきって、現代帝国主義の下での七〇年代の方向を導きだす必要がある。最低これだけは必要だ。職場・地区反戦の活動もこのなかで正しい評価がでるだろうしこれができたらわれわれは運動のイニシアをとることができる。

学園からの告発

兵庫県の尼崎北高校では昨年の暮以来おこなわれた生徒心得撤廃斗争（本紙三月二十五日号）が、三年生の卒業と校長・教頭の入れ替えなどにより一時停滞していたが、九月以降再びもりあがりをみせ、10・21には自主講座をかちとり、七十名が大阪のデモに参加した。生徒のなかにふかく入り大衆の要求にもとづく運動を展開している尼北共斗会議は、学校や反動的なPTA幹部の恫喝をはねのけ、多数の学生大衆をひきつけて闘っている。

昨年十一月二十八日生徒心得撤廃のための生徒総会、三年生の追い出し、その後の集会を行なう。

十二月十七日、生徒会執行部の選挙、この頃から、生徒総会で可決された事が、形骸化する。

一月三十日、校長、生徒課との大衆団交を起点として尼北全共斗が表面に出る。

二月十二日、他校の生徒を入れてデモ。しかし一般生徒により他校生は校外に追い出され、その後動により可決する。

その後、たびたび生徒総会が開かれ、生徒憲章を作るという事を可決、作成委員会が発足したが、日数を経るにつれて異常なまでの一般生徒の高揚が形骸化し、うすらいで行く。そして、校長・教頭が左遷されて、反動校長と県教委指導主事であった教頭が赴任してくる。更に無関心な新一年生と反動校長・教頭、三年生ばかりだった共斗会議が卒業した事により、一般生徒は旧秩序体に帰って行った。

その後、反逆分子達により、「長中心の学校体制反対、教師の御頭を断つ会」などが結成されたが用機関的存在の執行部の変革、また、一般生徒を揺り動かすだけの問題提起ができず、内部から崩壊し、偽りの民主化のまま夏休みに入って行ったのである。しかし尼北全共斗と「頭を断つ会」などの各グループが行なった事で、一般生徒のこれまでの価値感が変化しつつあり、先入観は破壊されつつあった。反面「教育とは」「自由とは」と問いかけてきたはずの斗争は単なる諸規則作成の問題へと落ち込んで行ったのである。主体性を欠いた斗争と、表面的な民主主義に溺れていた一般生徒、生徒の力に奢った嫉くだけの教師、生徒会執行部の曖昧な行動、校長・教頭の実に巧妙な管理、これらによって尼北斗争は、まさに終結敗北への道をたどるかに見えた。

しかし、これらに対して、九月一日、一部の反逆分子が、自然発生的に集まり、結成されたのが第二次尼北共斗会議である。われわれ尼北共斗会議は、現在の尼北民主化が、いかに欺瞞的であるかを暴露し、職員会議の秘密主義と、校三、大阪の府教委通達をどう思うか、又県教委通達が出された場合どう対処するか

これらを基盤として、第二次共闘会議は発足したのである。

九月二十日、四項目要求、即ち
一、職員会議公開
二、職員会議決定事項、校長決定事項への拒否権
三、諸規則粉砕
四、服装規程撤廃、服装自由化
更には、公開質問状
一、七〇年安保をどのようにとらえるか
二、大学紛争をどのように思うか又授業中どのように理解させるのか
三、大阪の府教委通達をどう思うか、又県教委通達が出された事により、共斗会議の意義がうんぬんされ、会議が開かれ、一日中授業をボイコットし、学校体制を批判、糾弾しなくなってしまった事である。

二十一日、朝から事態は悪化しければわからない。どこまでならよくて、どこからが駄目なのかを

尼北高民主化の闘い
一人ひとりが闘争主体に

などの立て看板を出した。しかし徒のうちの三名が三十時間ハンガ不当にも公開質問状が、学校側（教頭）によって隠されてしまったのである。

九月二十二日、昼休み共斗会議によって、校内デモが行なわれ、その後非合法集会を開いた。その集会で、社会科教師の「学校の規則は憲法より優先する」という発言により、集会は紛糾し、昼休み終了、始業のベルが鳴っても集まった。

しかしわれわれ第二次共斗会議ともせず、皆の要求により、共斗会議がジグザグデモをヘルメット

ぐさま結成された。反戦会議は、政治闘争を校内へとり込み、更に高い民主化斗争へ進んで行った。その基盤として国際反戦デーをとり入れて行った。十月二十一日、校内において、反戦討論集会を行なうべく、署名活動を開始した。反戦会議を基盤として、反戦集会実行委員会をつくり千四百名中、五百名の署名を集めた。

実行委は、生徒の手による自主講座を主張したにもかかわらず、学校は授業の一部として行なうという従来の枠をこえた闘いを再び発する事

ース分け反対〇募集と撤廃に満ちた北高祭反対などをスローガンとして斗争を続けた。そしてわれわれ共斗会議は彼らを支援すべく、二十八日校門をヘルメット姿でデモ、討論、フォークゲリラを行なった。

しかしわれわれ第二次共斗会議は、動こうが何故解体せざるを得なかったか。我々のメンバー各自が主体的に闘争主体に変革されていく過程を総括しきれなかったからである。

九月二十三日、四項目要求、即ち
一、職員会議公開
二、職員会議決定事項、校長決定事項への拒否権
三、諸規則粉砕
四、服装規程撤廃、服装自由化
更には、公開質問状
一、七〇年安保をどのようにとらえるか
二、大学紛争をどのように思うか又授業中どのように理解させるのか
三、大阪の府教委通達をどう思うか、又県教委通達が出された事により、共斗会議の意義がうんぬんされ、会議が開かれ、一日中授業をボイコットし、学校体制を批判、糾弾しなくなってしまった事である。

二十一日、朝から事態は悪化しければわからない。どこまでならよくて、どこからが駄目なのかを

政策を考えよう
大事な独自の闘争組織

G　組合が多数で決定した方針がどうしても正しくないと考えるばあい、これに従うかどうかという水準で二者択一的に考えると行きとどまってしまう。敢えて敗北をひき受けてもトロツキスト運動だとのレッテルをはる以外何の運動もしない。彼らは非難し運動の足引っぱりをするだけだ。だからいま民青内部からがたがたになっている。民青は数は多いが内容は貧弱だ。

「相川病院不当解雇反対闘争」の終結にあたっての報告

昭和四十年一月以来、四年間にわたって斗ってまいりました「相川病院不当解雇反対斗争」は、去る八月十一日、大阪地方労働委員会、神崎吉雄氏のあっせん案
一、医療法人共愛会は、山田きみ枝及矢谷圭に対する懲戒解雇について、遺憾の点があったことを認め、これをとりけす。
二、山田きみ枝、矢谷圭は自己退職する。
三、解決金として、二名に二百万円を支払う。
四、二名は地労委、地裁の申請をとり下げる。
を、双方受諾して、一応の終結に至りました。長年にわたる皆様の温い物心両面の御支援に対し、心から御礼申しあげると共に、御報告致します。

私たちは、今回の協定で、解雇の不当を認めさせ、且つ撤回させたということは、一応の勝利であると考えています。しかし一方、無条件の職場復帰ではないこと、又、解雇と関連して引きおこされた、相川病院理事者と、彼らを指導した、日本共産党（代々木派）の、相川病院労働者に対する不当な圧迫・懲戒の無視によって退職を余儀なくされた十数名の労働者の、物心両面の苦痛。又、この反対斗争を通じて、吹田地域の労働組合をはじめ、全大阪の労働運動の中に、強引に持込まれた分裂策謀の結果等についての、解決を示す内容が含まれていない点に、私たちは、強い満不をもっております。

私たちの解雇取消の裁判の勝利の見透しは、当初より全く明らかなものでありました。相手方弁護士ですら、正論で弁護の余地がなく、ただただ四年間にわたって、全く卑劣な裁判の引き伸しをくり返すことに終始していました。私たちは、裁判のこれまでの経過から考えて、今後再びだらだらといつまでも引き伸され、その結果、判決で勝利を認めさせるよりは、不充分とはいえ、また動機と意図はともあれ、彼らが自らすすんで、その非を認め、解雇を取消すといった態度を示した事実を確認し、且つ広く人々の前に明らかにすることによって、七〇年安保を目前に控え、全労働運動、政治運動が統一して、大きく強く斗うべき時期に、日本共産党が、相川病院で、私たちに行った同質のあやまちを、更に拡大してくり返していることを阻止する歯止めとすることが、現在より必要であると考え、協定に同意しました。

私たちは、私たちの斗いが、非常に不充分な力ではありましたが、横暴きわめる共産党の分裂活動に抵抗し、そして部分的にも勝利をかちとったことに誇りをもち、今後はこの協定で斗いとれなかった不充分な評点を更に、現在の運動へ再び参加する中で皆さんと共に斗いとっていく決意でおります。

最後にくり返し、多くの支援を下さった皆様、又裁判斗争で御尽力下さった弁護士の諸先生に厚く御礼申し上げ、報告を終ります。

一九六九年十月

相川病院不当解雇撤回共闘会議
山田きみ枝
矢谷圭

連絡先
富田町診療所
TEL〇七二六（九六）七七五四

マッセンは間違い
組合では何もやれないか

出席者

A 電信反戦行動委員会
B 教員
C 大学職員
D 豊能反戦青年委員会
E 畑反戦反合行動委員会
F 神港労連斗争委員
G 臨海反戦青年委員会

A　私はマッセンストライキの論理そのものに反対しないが、いまの組合運動との関連で否定的にならざるをえない。いま圧倒的な民同支配の労働運動がある。そのなかでわれわれのやれることが何もないとするから、全然ちがったところで、地区とか労闘とかというところで、地区ソビエトを作り革命へもっていくという考えがでている。一方ではいまの労働組合のなかに、何らかのやれることがありうるということを前提にして議論をしている。はじめにここを討論しないと議論が平行線になる。

E　われわれの組合が最初七十八人いたのがいま二十一人になっている。これはわれわれが過激だからという人がいるが、私はそうは思わない。

民同は人数の多い方につく。この多数派は考えがあって批判があるのかというとそうは限らない。民同には方針がなく、きのうはおくれた人たちの上に、今日われわれの上にのっかっている。しかしわれわれはいまの労働運動が限界だということには否定的だ。われわれも中電のスト実の諸君のようにやろうと思えばいつでもできた。しかしこうやって企業の枠をこえて運動が広がるとは思えないからやらない。一支部のなかでおこったラジカルな闘争でも、他の支部にいけば活動家でとまってしまい、その経験は横に広がらない。われわれはそれを克服するために、オルグやビラでは限界があるから、実際に行動による連帯を組織することを考えている。

D　中電のマッセンストについては、豊能反戦でも大部討論になった。われわれはあの闘争はマッセン(大衆的)になりえないと考えていたが、十月三日に内部の労働者がたとえ一人にせよ立上ったことは見殺しにはできないし、連帯が必要だった。われわれの連帯とは一緒に坐り込みビラをまくことでなく、われわれの地域で拠点職場でストをうち抜くことだと考えた。この立場から10・21の拠点スト体制構築にとりくんだ。

総評の若井事務局長は大阪の集会で「10・21がこんなにもりあがったのは新左翼のおかげだ」ということをしゃべっていたが、本当にそのとおりだと思う。

大阪にKという四百人の労働者の働く工場がある。ここでは一人の労働者が地区反戦に入って一年半前に三里塚へいき逮捕された。組合はJCだが二十三日間の拘留の後彼が職場にでてきたとき、組合は彼の首を守った。彼を中心にして職場反戦が組織された。

今年の10・21にはこの職場反戦は、たとえ少数になろうとも闘いぬこうと決意し、当日一番戦闘的な百人あまりの拠点職場のストライキを呼びかけた。ここでは一分でも遅刻したら門のなかへ入れなかったのを、10・21の早朝地区反戦の仲間とともに門前で就業時間にくいこむ職場集会を開き、会社はおくれても入構を認めざるをえなかった。昼休みには組合主催で政治集会をひらいた。青年部は扇町の集会に参加するとの方針をたてたところ、組合執行部はバス三台を用意して総評のデモに参加してパクられたら組合で補償するから、扇町にはいかないでくれと対応してきた。反戦で討論したところ、当日ストライキはできなかったが、扇町に代表を派遣し、青年部をふくめて一五〇名が大手前に参加した。こんなに大量の労働者が総評のデモに参加したのは、Kでいまだなかったことだった。会社は何をおそれたのか、敷地に高い塀をめぐらし、夜間照明をして、警備員をふやすというものものしい警戒態勢をしいていった。

これらの動きのなかで、本当に闘う部隊は何なのか、会社は何を恐れているのか、自分達は何に向かって立上らなければならないのかを、組合員大衆はこの闘争を通じて知ることができた。これはいままでの組合指導の枠内からは不可能な闘争だ。少数部分の決起が少数に終らずに、広げていくことができたためにKでは成功した。

10・21を契機におこりつつある流動化は、いままでの街頭闘争の尖鋭化をはるかにのりこえている。労働者のストライキ闘争を組織しようと自覚した人たちによって、自発的にストライキ実行委が地域につくられ、職場へオルグに入っている。職場にもこのオルグをうけ入れる空気ができている。反戦活動家は今後こうした運動を担っていく必要がある。

A　マッセンストが一般的な型の問題として提起されているように思うので、その点についてふれたい。

六〇年安保以後十年間の労研運動と二年間の反戦活動のなかで、民同と日共の路線が現在の労働運動を前進させるものでないことをわれわれは徹底して明らかにしてきた。それ故にマッセンストの拠点が中電に設定されたのだと思う。

われわれはマッセンストとは全然無関係なところから闘いを組織し、二十一日には指令がないにもかかわらず三百名近い労働者が自発的に闘争に参加している。もし全然労働組合がやる気のないところでは、一名でも二名でも立上ったら、全体にものすごい問題提起になっただろう。私の職場では百十数名のうち、四十七名が個人の責任で闘争に参加している。このような情況があるなかであえてなぜマッセンストの諸君があのような闘争形態をとったのか、いまでも疑問だ。

われわれは六ケ月間にわたって電信電話のもつ帝国主義支配のなかでの地位と役割について、徹底的に論議し、そのなかで三百名の部隊を組織することができた。これを無視して、いまの労働組合ナンセンスということで、マッセンストを提起するのは間違いだと思う。このような部厚い政治活動と関連しておこなわれる闘争を、公社が簡単に切りくずすことはできなくなっている。

E　われわれの組合員のなかにはヘルメットかぶるのをいやがる仲間もいるし、反戦というと恐がるものもいる。反戦はジャーナリズムによってゆがめられて宣伝されているために、反戦が争議の応援にくるというと、火焔ビンをなげて工場に火をつけ、角材をもって目茶苦茶にあばれまわって、みんなつかまり、闘争が敗北してしまうと心配する。そういう考え方がわれわれの組合にもつよかった。われわれは彼らを抜きにして反戦を呼ぶことにはならない。

そのためわれわれは就労闘争の先頭に立って闘った。われわれが暴力団になぐられけられても闘っているのをみて、何故反戦の連中はあそこまでして闘うのかと疑問をだしてくる。そのなかでわれわれの主張も話すことができるし、理解してもらえるようになる。

全金の指導部はわれわれの運動がきにいらない。みんなの前でどなられケンカになったこともよくある。本当の労働運動を追及するうえで、いまの組合には枠がかけられている。なぜなら各支部の職場には、われわれの闘争に参加しようとする動きがあっても、支部の承認がないかぎり参加できないようになっている。これを破らないといけない。

畑鉄工の闘争は月二十五万から四十万円ぐらいかかっている。われわれの闘争が他の労働者にとっては何の意味もない闘争であるならば、われわれは争議団になって法廷闘争一本にしぼり、みんながアルバイトにいき、裁判の日だけ集まるようにしたらよい。これが一番かんたんだ。しかしわれわれが多額の金をつかい困難な闘いをつづけている理由は、労働者が徹底的に資本家と闘かおうとするかぎり、このような情況がおこることはさけられない。その代表としてわれわれは闘っている。

畑鉄工は全金の組合でいつも最後まで闘う組合だったが、これを機会に合理化・権利・政治闘争でも闘える組合にしようとしている。

われわれは働くことによって自分で自分の首をしめている面がある。働くことによって資本家はもうけ、それによって労働強化をあおり、戦争をおこしていく。われわれは働かなければ食べられないから、職場でいつでも政治ストをうてる態勢を作る必要があるし、政治的な街頭デモにも参加する必要がある。

21日に年休をとりデモに出発する中電の労働者

三人の首切りかかえ闘う堺臨海反戦

G　臨海反戦の活動を最初にかんたんに報告しておきたい。

宇部生コンでは一年前に一人、二月前に二人首切られた。ここの首切られた労働者は毎日職場に入っている。職場で歓迎するから会社はおいだすことができない。会社の慰安旅行にも一緒にいって、ドンチャン騒ぎをしてくる。そんな状態のなかで最近二カ月前二人の首切りがでた。二人は世帯持ちだから毎日職場へでれない。それで一人が働いて、もう一人が職場へオルグにいっている。しかし職場の空気はなかなか盛上らない。

封鎖をやれといってくる反戦がある。職場の労働者は一日か二日であればいつでもストライキをやる。しかし封鎖もストも何日もつづかない。問題は闘争の見通しだ。はたしてやって職場へもどれるかということを疑問だという。

首切られた本人たちは何も宇部生コンにもどりたいと思っていない。彼らは首切ったのは間違いだと会社に何とかして認めさせたいと、頑張っている。堺の臨海工業地帯に一本の赤旗も立てさせないというのが独占の方針だ。だから宇部生コンの赤旗は決して降さない。闘いを横にひろげるために、八幡、日立造船、ゼネラル石油などの巨大工場へビラを入れている。これを首切られた人たちの一番重要な活動にしている。

ここの反戦では扇町へいくかどうか討論したが、いかないことにきまった。長期柔軟路線で闘うというのが支配的な意見だ。

臨海反戦にはこの地域の大独占の経営からそれぞれ入ってきている。反戦の集会ででる悩みは、みな少数の孤立からどうぬけだすかということだ。そのためには、いま労働者が何を考えているか、何を要求しているのかということを抜きにして、自分のいい分だけを吹いていても、少しも大きくならない。反戦ではいま各職場の報告がなされて、それをどうするか論議になっている。

たとえ少数でも地域の各経営の労働者を結集して、今日、明日の闘争をどうするということばかり目をうばわれないで、長いみとおしと広い視野に立って、革命を担っていこうと自覚した労働者を結集し、そだてていく場としての反戦が、まだ歴史は浅いができつつある。

マッセンストの問題だが、党と労働組合をゴッチャにして、労働組合に党の役割をおわそうとするから、いまの労働組合はナンセンスということになって、敗北主義的なやけっぱちの行動がでてくる。

闘争妨害の民青
数はあっても恐くない

F　総評や全金に畑鉄工の争議の応援をしろといったところで、彼らがするはずがない。問題は一般の労働者がなぜ畑鉄工の闘争を支援しないのかということだ。そこで畑鉄工の労働運動の質が問題になる。

神港労連でも十五単組あるが、ひとつがすすんだ経験をしたら、必ず他の組合に交流するようにしている。そしていつも全体としてひとつのものに行動できるようにしている。そうすると全体が同時にすすむようになる。相手は叩きようがない。もしたたいたらすぐ他の組合から集まってくる。そうして労働者の連帯ができていく。

畑鉄工の闘争は敗北するかもしれない。そのときしかしこの闘争できたえられた人は、ここで止めてしまうかというと必ず新しいところで闘いを始めるだろう。長い目で運動をみないと全学連がきてくれないかという発想が生れる。

A　いま一番とわれていることは日共にどう対応するとか、個々の闘争の局面をどう盛りあげるかということではないと思う。いま日本の労働運動がどういう転換点にあるかを明確にすることだ。

日共を支持する人はいくらかあっても、彼らの路線のあやまりは大衆的にすでに明確になっている彼らは決して大衆的に支持されえないことは明らかだ。

民青はある程度勢力をもっていても、中電の例をとれば何か闘争があると彼らはすぐ割りだされてしまう。彼らは何も恐ろしいことはない。今回の10・21でも、彼らは年休闘争に参加できないという、これで日頃威勢のいいことをいっている民青の信頼が、職場ですっかりなくなってしまった。たとえ彼らのデモが何万あつめようと、大衆が立上ったら彼らは消えてしまう。

社会党＝民同も反戦の出現以降崩壊が始まっている。反戦の力量はまだたいしたことないが、今後の労働運動の中心になっていかざるをえない。

安保体制というものと反戦はどう対決しそれを行動化し、その闘いを労働組合のなかにどう波及していくのか、それを労働組合のなかで語っていく必要がある。その内容を誤らないかぎり、学園で、職場で、街頭でデモや集会を何十回やっても、どうにもならないと思う。

新左翼のなかには、学園闘争では通用しても労働運動ではまったく通用しないものや、もちこもうとしているものがある。たとえば「自己否定」だが、労働者にとって就労闘争は「自己否定」でなく自己肯定の闘いだ。労働者が働くということは一面では安保を支えることだ。労働者はそのなかで安保を崩す闘いをくもうとしている

新左翼がどのような問題提起をするのかということが、労働戦線全体から問われている。これを提起できれば日共＝民青はこわくない。

E　民青はそんなに弱いものではない。彼らは現実にふえているし、いまでは社会党＝民同もくわれているではないか。

大切な統一の方向
闘争で代々木は孤立

G　長崎造船では、右翼社民の第二組合が圧倒的に強くて、共産党も社会党も反戦も大弾圧をうけている。こんなところでは「赤旗」で反戦をトロツキストと悪口いおうと、民青は反戦に統一行動を申入れてくる。反戦は苦笑しながら10・21でも民青と統一集会をもっている。ここで大事なことは労働者に対民青という小さなところに眼をむけさせることではなく、民青は結局支配階級にくっついていくのだから、悪の元凶である日本帝国主義の姿をいつの場合でも徹底的に明らかにし、これに対決する労働者階級の統一をどう作るのかという、大きな方向を見失しなってはいけない。民青が何故あやまりなのか、理屈で納得させようとしてもそれは無理だ。しかし大衆の要求を基礎にして闘争すれば民青の本質はすぐ暴露される。宇部生コンでも首切り反対闘争の過程で日共党員はすべて追出されてしまった。まず首切りがでたとき日共が指導部を握っている全自運は首を守らなかった。カンパしようと組合できまったとき、代々木はくず鉄をあつめ、それを売ってカンパしようといったところ、本当に支援する気があるのかと、一般組合員をカンカンに怒らせてしまった。さらに共産党員が労務課長に「新年宴会に一度首切ったものを何故入れるのか」と電話をかけているのをきかれてしまった。

臨海反戦でよびかけて先日宇部生コンの決起集会をもったら、全自運は百名もの組合員を動員してきた。反戦の連中は「こいつら、何の役にも立たないくせに、がん首ばかり並べやがって」と思っているが、一般組合員は全自運はよく動員してくれたと喜んでいる。このなかには、まちがったものと正しいものの二つがいりまじっている。これをいっしょくたにしてまとめて非難したらこちらが孤立する。労働者の要求を基礎に闘うという正い姿勢をもって運動するかぎり、反戦が孤立することはありえない。どちらが労働者の利益を守るのかは闘争のなかでこそはっきりさせることができる。

現在、労働者は一体何を構築したらいいのか。

革命運動を担おうと自覚した労働者のグループをつくるのに、大衆の要求からはなれたところで運動を作ってもできないとおもう。大衆はさまざまな要求をもっている。そのなかで政治要求だけをとりだして闘かおうとするのではなく、たとえ政治的でない要求でもその要求をとことんまで追求しようとするかぎり、その闘争は重要な政治的意味をもってくるし、それなりの思想的な高さを要求されてくる。このような闘争を組織するなかで、労働者のなかに政治的力量も蓄積されてくるし、意識的なグループも確立してくる。

A　民青は学園でも職場でもたしかにのびている。職場で安保沖縄闘争をわれわれが提起すると、彼らはトロツキストとレッテルをはり、自主防衛論をとき反動的ナショナリズムを鼓吹する。われわれと論理では平行線をたどる。しかし日本の現状をどう闘うのかということになると、彼らの運動はたちまち破産してしまう。

この点学園ではちょっとちがうと思うけど…。

反戦と組合の関係
「全金につかず離れず」

C　学生の間では理論闘争がさかんだが、私は事務労働者だから、皆さんの職場とかわりはない。組

(四面へつづく)

（一面からつづく）

のいずれを選択するのかをわれわれは迫られていた。10・21について電通労組は時間外早朝集会の方針をだしたが、われわれはこの闘争を指令待ちということではなく基本的には全国ストを追及し、指令なしでストライキをやろうということで10・21にむけて組織していった。

このなかで人数はわずかだがマッセンストと時間内に食込む転場集会の二つの主張が対立した。マッセンスト派は10・21をまたずして火焔ビンを投げ自滅した。一方われわれの呼びかけによって当日二五十から三百の人たちが欠勤を覚悟で、年休をだして闘争に参加した。建物のまわりには金網がはられ、機動隊が多数待機するなかで、これらの人たちは、正面玄関前に坐り込んだ。

私はこの年休闘争が山猫ストにもなっていないし、個人の自覚と責任の上に闘争を組んだのだからマッセンストの延長上にあるのではないかと考える。マッセンストは形の上では、労務課を占拠したり屋上から火焔ビンを投げたりしたが、組合員の反応は、正直にいって、これに対して非常に冷淡であった。いままで反戦運動をやってきた活動家は、何とかせんといかんなという気に多少なったが、それだけだった。

われわれがマッセンストに賛成できなかった理由は、二つ考えている。ひとつは情況判断としてマッセンストという限り、今秋に革命を展望するという情況でできる闘争であるから、大阪中電でもし一発やればここが発火点となって来春あたりまでに、全国的に波及するのかどうかが基準になるが、そのような情況にはないということ。もうひとつは大衆を抜きにして、確認された人たちだけで闘争を展開する、大衆と断絶されたところで運動を追及しようとする考え方が地区反戦のなかに非常につよい。そのため転場では、彼らの行動に対してあいつらは立派だが俺達は別だという眼でみられ、いざ行動したときに冷淡な反応しかでてこない。

しかしマッセンスト派の与えた衝撃によって、既成の運動ではどうにもしようがないと考える二百五十名の人たちがあつまり、年休闘争に結集したということもいえると思う。

11・13はマッセンストでは闘えない。電信電話は日本帝国主義の再編のなかで非常に大きな役割をはたそうとしている。情報産業の鍵となるデーター通信を電々公社がうけもつことにより、ただ単なる合理化ではなく、非常に重要な政治的経済役割をもってでてきている。

その頂点として佐藤は沖縄・安保を11月佐藤訪米によって片をつけようとしている。これを粉砕しようということを大衆のなかに宣伝していって、そのなかで11・13の闘争の展望をつかんでいきたい。

逆バリ破り構内デモ

畑反戦反合行動委

われわれは百八十日間にわたって、会社のロックアウトと闘っている。この闘争のなかで七八名いた組合員は二一名にへっている。われわれは暴力団や警察の介入に対して、これにひるまず断固闘いぬいてきた。

この闘争の中心を担っているのは反戦青年委員会だ。全金のなかでも民青が過半数をしめてきているなかにあって、当初全金内部で反戦を維持することはむずかしい情況にあった。われわれはいままでの転場反戦がつきだしえなかったものを、ロック闘争のなかでつきだしていこうじゃないかということで、闘争にとりくんでいる。いままで民同が闘争委員会をしめていたために、反戦がハッスルすると上からしめつけがでて、たえずわれわれはおさえつけられてきた。われわれはいままでの民同のやり方で闘争をつづけてきたならば、脱落した人はもっと多かったと思う。民同は口では法廷闘争も転場闘争もともにとりくもうといいながら実際にはちがう。法廷闘争に期待をかけ、ここに一切の闘争を従属させようとしてきた。

会社は今年の春闘で、われわれが安保粉砕・沖縄奪還を呼ぶのを口実にして、企業の枠をこえた運動をしている組合とは交渉しないと、ロックアウトをかけてきた。ロックアウト攻撃の狙いのなかには活動家の孤立化があった。

会社はいうことをきく者を就労させている。六十日をすぎると前途に対する不安、生活苦からおちていくものがあいついだ。中間層のなかには会社と話合いをしろといったが、会社は組合をつぶすことを目的にして、全員を拠りだし会社のいい分をのむなら話合いに応ずるという段階のなかでは、われわれが会社と話あうには、要求を全部おろすか、闘争態勢を解除するしかなかった。

民同は何とか会社との交渉のきっかけを作ろうとした。下からも会社と話合いをしろという突上げがあった。われわれはこれに反対した。われわれは彼らを理論的には粉砕できたが、彼らのだしてきた切実な問題に対して答えきることができない、という弱点をわれわれはまだもっていた。われわれは一日も早くこの段階をのりこえなければならなかった。

現行の労働者の諸権利、賃上げは民同の指導によってとれたものだ。今まで彼らにとってかわってやったことのないものが、民同を批判したところで、こうだというものを打ちだしきれない。転場反戦の壁は、現実にわれわれの組合のなかにもある。われわれは闘争のなかで、いままで口にしてきたことを、実際につくりあげようとしてとりくんだ。

われわれは四名の反戦から出発した。反戦と組合の動員がかちあったとき、われわれの力量が不足のため組合のデモに参加せざるをえなかった。しかし今年の1・17・18の京都でひらかれた、沖縄問題に関する日米ゼミナールを粉砕する反戦の闘争に、はじめて組合青婦部段階で参加した。デモに出発するとき官憲とぶつかっても絶対後退しないことを意志一致した。機動隊とぶつかってこてんこてんにやられたが、みんながにげるなかで、われわれだけが最後まで頑張った。これでわれわれは自信がついた。

全共闘・反戦の人たちは、一般に、個別の企業・学園の闘争はどんなに徹底的に闘ったところで、すべて敗北してきたから街頭で闘い、そのなかから官憲の弾圧をはねかえす闘いを作りあげようという。しかしわれわれにいわせれば、それはおかしい。いままでの闘いは企業にとじこもり、産別にさえ広がっていない。地域にも広がっていない。支援する組織も限定されている。これが労働争議の現状だ。民同に対して批判はあっても、この狭い枠を破れないから敗北していったのが、労働争議の現状だ。

批判されながらも転場を中心にやってきたわれわれのスクラムのつよさは、街頭でも暴力団との闘いでも実証された。われわれは街頭でも転場でも反戦青年委員会をしのぐものをつくりだしてきた。

全金の内部にわれわれの部隊は広がりつつある。10・17にわれわれは集会を開いた。

10・21には三十分の転場でのストライキをわれわれは提起した。

われわれは三日間組合で徹底的に討論した。われわれは多数をもっているから、多数決でおしきろうと思えばいつでもおしきれる。しかし組合員全体で10・21にとりくまなければ意味がない。民同の指導の下でなく、われわれの方針の下で組合員全員が10・21にとりくめるようにするために、時間をかけて討論した。

その結果三十分ストは実現しなかった。しかしいままで逆バリケードを破って工場内に入ったことがなかったが、今回は全員バリを破り塀をのりこえ全員なかに入ることをきめ、そのなかで10・21政治集会をかちとり、会社へ団交を迫り、構内デモをやって、事実上生産をマヒさせることになった。

二十一日は女子をのぞいて、八時に全員塀をのりこえた。就労していた第二組合員は全員会社からでていった。半日以上のストをうったことになった。その日全金から総評のデモに参加するよう指令があったが、われわれは七〇年闘争を実際にやる気がなくて、形式だけですまそうとしている総評のデモに参加したくない、中電マッセンストに連帯するために、扇町公園へいくといって、幹部と論争になり、総評の集会で闘争報告させることを条件に代表を扇町へおくった。

反戦と権利はひとつ

神港労連　六日間の埠頭占拠で勝利

神戸港では新聞にでたように、七日間にわたるコンテナー埠頭占拠闘争があった。

私は戦後二十年労働運動をやってきたが、この闘争であらためて労働運動について教えられるところがあった。私は二・一闘争のとき共産党に入ったが、当時権利闘争などやったことがなかった。ストライキをやれば金はとれた。出世のために組合にでようという時代だった。民同も共産党も労働運動はゼニをとることだと思っている。こんな労働運動から何もうるものない。だから闘わなくても金がとれるいまの時代になると無方針になっている。

それ故権利闘争をやらなければいけないということで、十数年前港湾へ入った。同じ仕事に対して会社が差をつけると、仲仕の間でものすごくケンカになる。当時安定所の日雇いが二百円、土方が六百円、仲仕が八百円だった。仲仕には会社直轄の本工、これは全港湾の組合員で、われわれの二倍の給料をとっていた。われわれと同じ仕事をしてなぜ賃金がちがうんだということでケンカした。これが神港労連の始まりだ。

それで神戸では差がなくなったので横浜へ広げた。

港湾は全電通と同じで、公共性軍事性をもっている。戦争準備と権利問題は非常に密接に結びついている。いまの権利状態は、戦争中より劣悪だ。いま朝鮮戦争当時にできた軍事体制をぶちこわせということが現場で問題になっている。というのは朝鮮戦争当時の占領軍政下の労働態様が、いまでもそのままつづいているからだ。

軍需物資の荷役は雨が降ろうが突貫でやらせる。いそぐときは二十四時間、えげつないときは四十八時間やらせる。長時間労働にもほどがある。飯は仕事の都合であとになったり先になったりする。飯をかみかみ仕事させるときがある。休憩所はなく飯は立ぐい。便所は立小便。深夜作業の休憩一時間は、鉄板の上に新聞紙をひいてねる。これは軍隊体制そのままだ。ただ取締りがきつくなってヒロポンうつのがなくなっただけだ。

この体制をのこしておくと、おかしくなったらすぐ軍需荷役にきりかえられてしまう。これをのこしておいたら神戸港は軍事基地になってしまうということで、権利回復の闘いにとりくんでいる。これは即反戦闘になる。

これがあれだけのストライキをうてる原因になっている。

いまわ苦労しないでゼニがとれるようになっているし、戦争直後からくらべると、ゼニにたいして困っていない。こういう好況のときには、権利の問題を徹底的にだしていく必要がある。

権利闘争になるとごっついエネルギーがでてくる。

コンテナー船が入ってくるというのでその対策で闘争委員会をひらいて闘争方針を論議していた。しかし組合員は方針もスト権もあるもんか、明日船が入ってくるのにどうするんじゃといって、スト投票もやらないうちに、すわりこんでしまった。

われわれの労働条件は牛馬以下だ。牛馬だって二十四時間は働かない。私は五時半出動、定時に帰ったって七時だ。われわれ闘争指導部は、港湾労働者のおかれた状態がどんなに非人間的かを、くりかえし徹底的に明らかにしていった。政府はわれわれから税金をとるが、労働基準法はどこにあるのか。政府は自分の都合のいいときだけ人間扱いする。外国の例もしらべた。日本の港湾労働者の労働条件が世界の最低であることもわかった。

しかし闘争指導部はいま闘争に入ることにびびった。われわれは坐込む組合員に対して、「つかまってしまうぞ」といったら、彼らは「何ぬかしてんねえ、いまここにいるのは犬やねずみばかりや。つかまえにきたらかみついてやるぞ」といって五百名坐込んでしまった。全部すわりこんだからスト破りは一人もいない。七日間すわりこみ要求が全部通った。

権利問題を徹底的に掘りおこすこと、権利と戦争体制とは両立しない、権利を確立していくことが戦争体制をつきくずしていくことなのだということをはっきりさせておきたい。

ハチマキをしめた第一組合員におそいかかる暴力団

教員　時間内集会に反対する民青

10・21は四時集会ということで授業にはくいこまないが勤務時間に三十分くいこむ転場集会ということになり、全員が参加した。そこにいたる経過としては、組合の幹部は勤務時間にくいこむ実力闘争はいかん、それはしないで夜の総評主催の集会へ全員参加という案をだした。これに対して下部から反対がでてもめ、中央委員会で採決になり、わずか一票差で修正案がとおり勤務時間にくいこむ転場集会にきまった。

こうなったのは、民青が勤務時間にくいこむ転場集会に反対したからだ。彼らは全員が参加するのだから、全員が反対しない方向でやろうと主張した。

修正案を主張した人たちのなかには、教師は人の師たるものとして、沖縄・安保の闘いをやるのは当然だと、国民的課題という発想の人がある。この人たちは反代々木系の活動家の組織である「大阪反戦教師の会」に属する人たちで転場段階の闘争を放棄したままで聖転者意識的な発想から、安保・沖縄闘争が提起されている。

中核派系の教育労働者反戦会議は、聖転者意識を否定するが、労働者だから政治デモをするのは当然だと主張し、大部分東京へいってしまった。

独自の闘争組織を

市大転員

大阪市大では機動隊の常駐がつづいている。組合本部は代々木派がにぎり、四支部のうち理工支部をのぞく三支部は代々木の全一支配下にある。10・21に本部は三割動員を下してきたが、理工支部では三割以上最大限動員しようということでとりくんだ。

闘争の始めに話をもどすが、組合本部は大学立法反対闘争をさぼった。そこで理科系教員が学生に呼びかけ、大学立法に反対する闘争委員会を作り、転員もこれに参加し、組合とは別個の下からの盛上りによる闘争組織が、市大に始めて生れることになった。そこが集会抗議行動を独自にくんでいった。日共＝民青の中傷にもかかわらず六月二十日には一千二、三百人が結集して集会とデモを行なった。そこでこの組織を6・20実行委員会とわれわれは呼んでいる組合は上からの指令を消化するという立場で集会やデモを組織し行動も形式的だが、6・20の呼びかけた集会やデモは非常に盛上った。6・20を、永続的な組織にしていきたい。

非公然のスト実作る

豊能反戦

豊能は新明和という戦略拠点をかかえ、政治運動不在の地に、新しいラジカルな運動を形成してきた。昨年の10・21、ことしの4・28には、全力をあげて現地闘争にとりくんできた。この闘争のなかから街頭闘争だけでは地区反戦もつよくならないし、労働者階級のなかへ浸透するにも限界があるということを総括し、秋の闘争をどうするのか、組織のなかで論議してきた。

われわれは地域のなかで拠点を構築し、拠点が立上ることによって地域へ拡げていくという構想のもとに、秋の闘争では拠点ストからゼネストへのスローガンをかかげ、拠点構築に全力をあげた。われわれは八つの拠点をつくることができた。九月にそれらの拠点を結ぶ地域のストライキ実行委員会を反戦、ベ平連で組織した。そのなかで官憲と既成幹部の一体となった弾圧のなかで、これに耐えうる組織としてやっていくために、地区スト実は非公然の活動をつづけている。

反戦のメンバーは転場で「安保・沖縄を語る会」などという組織をつくり、そのなかで大衆を結集し活動をしている。

10・21には全遞・市転で二十数人の仲間が首をかけてやりぬくとの決意で結集した。対角線ビラといって、それぞれ他所の経営へビラを入れるという創意も生れた。新明和へも一週間つづけてビラをいれた。ベ平連も一週間住宅地へビラを入れた。

全遞では切りくずしによって最終的にうちぬくことができず、年休をとって闘争に参加したものに対する統制処分と書記の首切りがでている。

10・21当日は北へいく部分と南へいく部分とわけ、旗は南へいった。10・21でわれわれが考えなければならないことは、既成の指導部をおしのけ自ら闘いを切りひらいていった部分は、南でも北でも闘争の主体を担っていったし、それが地域的にはますます拡がっているのが現実だ、ということだ。いまかかえている課題は、組織の公然活動と非公然活動との使いわけ、11・13で事前に弾圧されずにどのように10・21を上廻る闘いを組織するかということだ。